こどもの民話

えすがたにょうぼう

ぶん・今江祥智　え・赤羽末吉

こどもの民話　　NDC913

えすがたにょうぼう

ぶん・今江祥智
え・赤羽末吉

1970年1月10日　発行
発行者　田中博之
印刷所　株式会社 東京印書館
発行所　盛光社

東京都千代田区富士見2の12の2
TEL(265)4781～5・振替東京46874

Printed in Japan

こどもの民話

えすがたにょうぼう

ぶん・今江祥智　え・赤羽末吉

盛光社

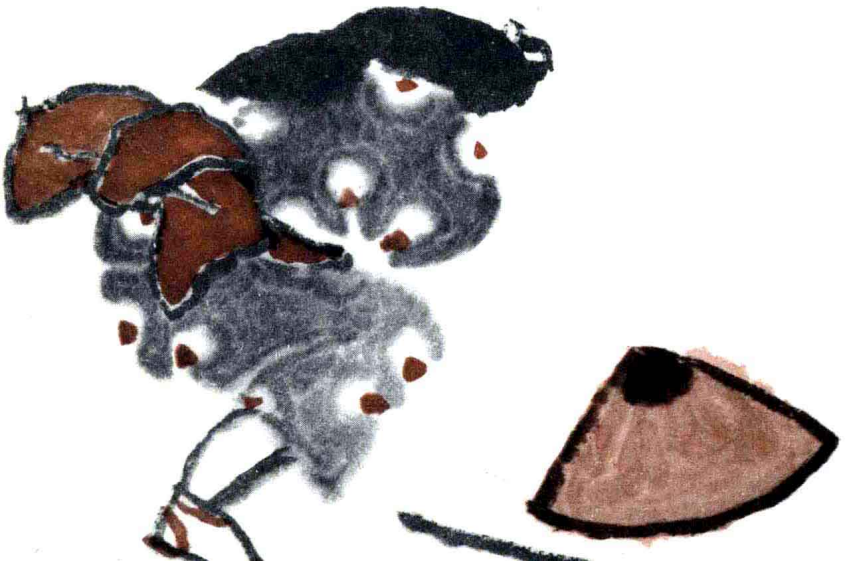
とんとんむかし、
ある村に、門太と
いう　わかものが　おった。
あさから　ばんまで、
それは　それは　よく
はたけの　せわを
したから、門太の
はたけは　どこよりも
みごとだった。

けんど　門太は
ほんとに　気が　よわく、
—そげに　はたらいて
ばっか　おらんと　そろそろ
にょうぼうでも　さがすと
いいに……
などと　いわれても
—いんや、おれみてえな
ひゃくしょうとこへ、
きて　くれる　女は　おらん。
と　かたく　くびを
ふるのでぇ　あった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ところが　ある日の　ゆうぐれの　こと。
門太が　はたけから　もどって　きよると、
だれやら　みちばたに　しゃがんで　おる。
ちかよって　みると、それは　それは
きれいな　ねえさまで　あった。

門太(もんた)は　もう
ぼうっと　あがって
しまい、口を　きく
どころでは　なかった。
が、ねえさまが　あんまり
かなしそうなので
とうとう
――あんた、あんべえでも
わるいかね。
と、きいて　しまった。



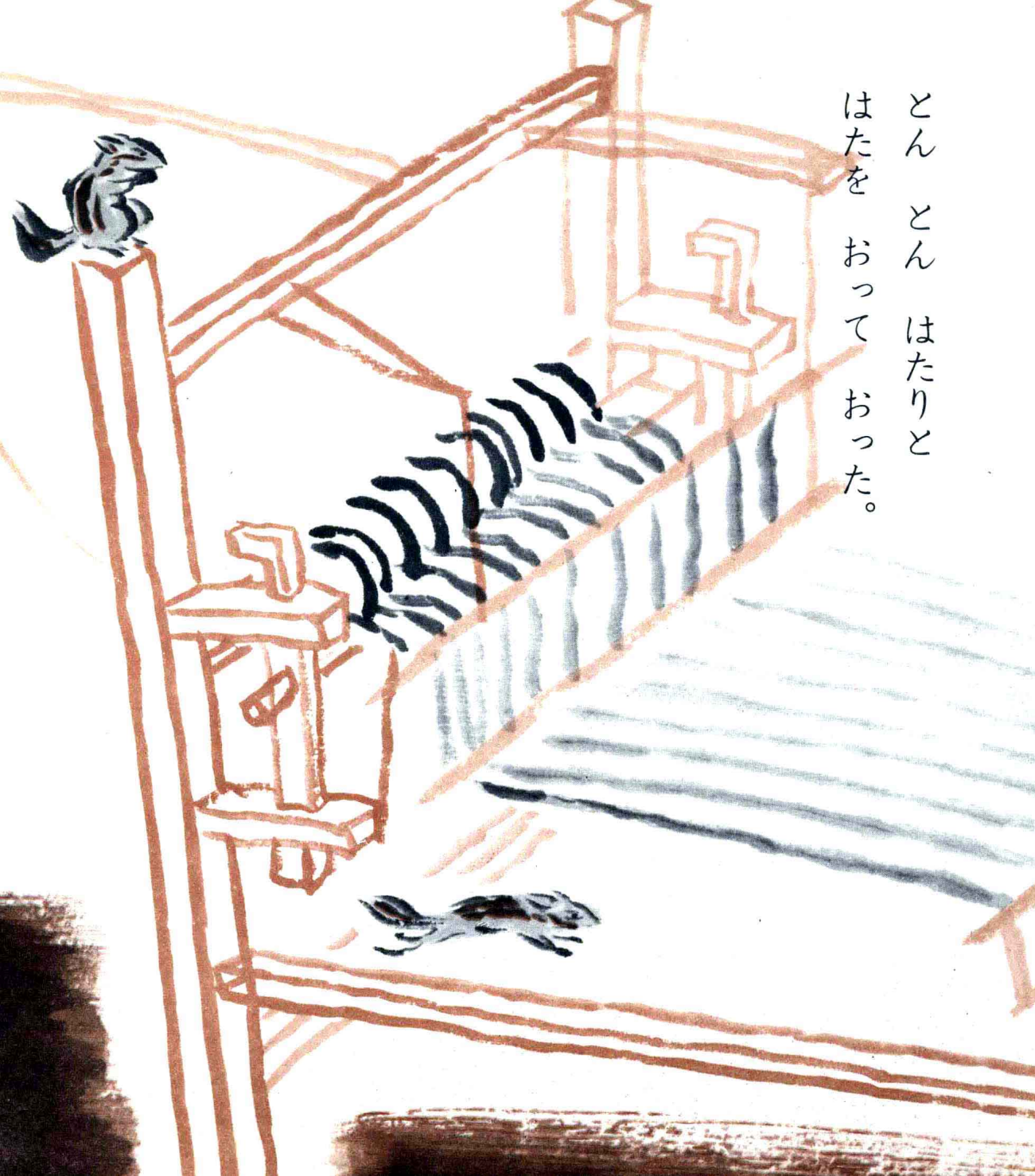
すると　ねえさまは、
だまって　わらんじを
ぶらんと　さげて　みせた。
はなおが　きれて　いた。
　なんだ、そんな　こと
だったのか、と　こしに
手を　やったが、
いつもの　手ぬぐいが
ない。そこで　あっさり
じぶんのを　ぬいで
さしだした。

—ちっとばか、
大きすぎるかも
しんね。
ねえさまは、
ぽっと　わろうて
そいつを　はいて
くれた。

門太が　ぺたぺた。
あるきよると、
ねえさまも　ついて
きて、いえに　つくと
こう　いいよる。
—あんたは
心が　やさしいで、
わしを　よめに
して　くれんか。
門太は　もう
ぽわぽわっと　なるくらい
うれしくて、だまって
大きく　うなずいた。

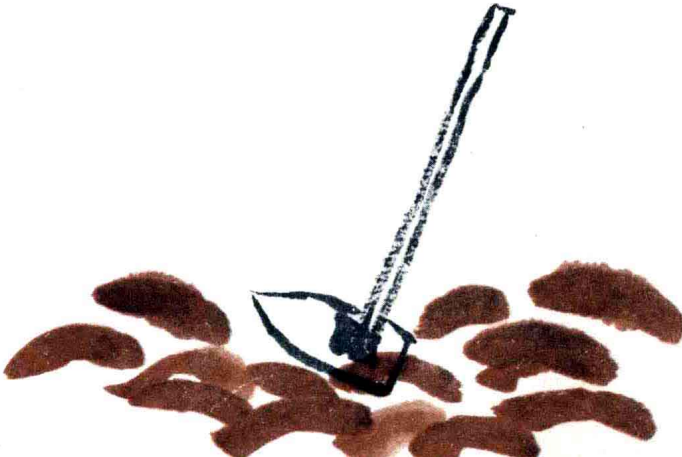
ねえさまは、また、
ぽうっと　わろうた。
ゆうぐれの　なかで
ぽうっと　白い
ねえさまの　かおを
みて、門太は
（おら、
ゆうがおの
花みてえな
にょうぼうを
もろうたぞ！）
と、さけびたい
きもちだった。

さて　あくる日、
門太は　あさから　えらい
いきおいで　うねうちを
はじめたが、お日さんが、
ことりとも　うごかん
うちに、いえに　もどって
きて　しまいよる。
にょうぼうが　気に
なって　気に　なって、
おちついて　はたけに
なんぞ　おられん
かったので　ある。
けんど　にょうぼうは
ちゃんと　うちに　いて

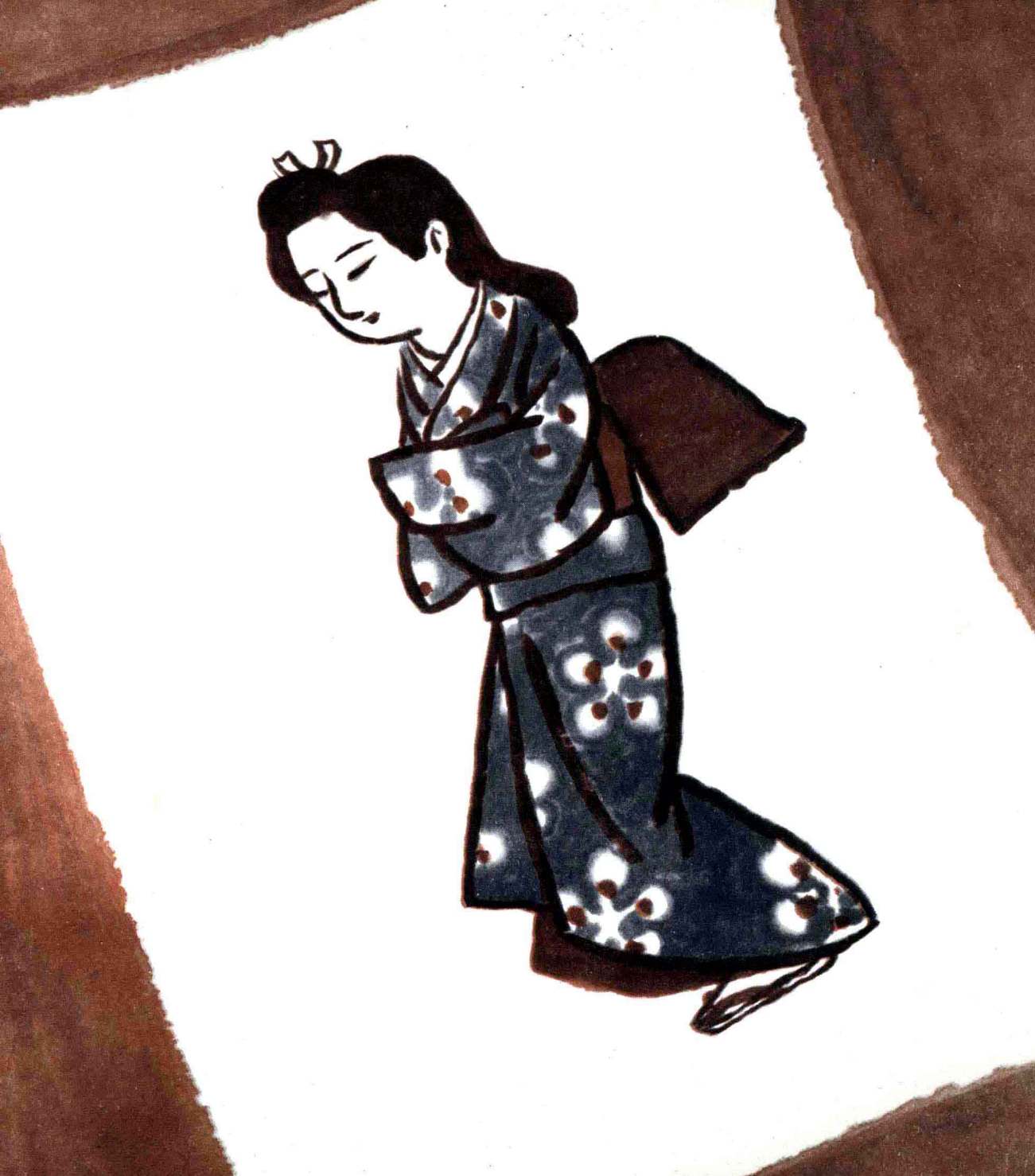


とん　とん　はたりと
はたを　おって　おった。

門太は　ほっとして
はたけへ　もどったが、
また　ひとうねも
うたぬ　うちに、
いえへ　もどって
しまった。
　にょうぼうは、
ちゃんと　おる。
門太は　ほっと　して
はたけに　もどったが、
ほんの　ちょんびり
すると、もう　足が
むずむずして　きて、



どうしても
いえの　ほうへ
あるきだして
しまうので　ある。



これでは
しごとに　ならない。
　そこで　にょうぼうは、
しばぐりを　かりんと
わって　たべながら、
ちっとの　ま
かんがえて　いたが、
やがて、こう　ささやいた。
――わしの　すがたを、
えに　かいて　もらうと
ええに。
　そして　まちへ　でかけて、
えかきに、えすがたを
かいて　もろうて　きた。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com